論文の内容の要旨

論文題目　　韓国洛東江下流域における近代河川改修の経緯と特徴
Processes and characteristics during improvement works in the downstream basin of the Nakdong river in modern times.

氏　　名　　崔 静 妍

韓国における大河川に対する河川改修は、日本の植民地支配下、朝鮮総督府の主導で行われた。総督府は河川改修を実施する第一の理由として、毎年のように発生する洪水とその膨大な被害を挙げている。一方、近代以前の朝鮮時代の河川に関する記録を見ると、大河川の水害や治水の記録はあまり見当たらない。一方、チョンゲチョンのような都心の中小河川については、頻繁に水害があって丁寧に手入れを行っていたことが分かる。つまり、近世から近代に移る時期が、韓国の河川治水において大きな転換点になっていることに気づく。それは、具体的にはどのような転換だったのであろうか。

本研究は、その疑問と自覚から出発する。そして、韓国最長の河川である洛東江に対して、特に、近代時期朝鮮総督府による河川改修が行われた下流域を中心に、改修が行われる以前の河川流域の状況から総督府の改修が終わるまでを時代的対象にして、以下のことを明らかにする。

まず、朝鮮総督府による河川改修が行われる以前の洛東江下流域において、どのような状態であり、どのような治水及び水利事業が行われたのかを明らかにする。その上、朝鮮総督府の河川調査と改修計画についてその経緯と内容を明らかにし、当時の流域状況が洛東江治水方針にどのように影響をしたのかを考察する。そして、実際の改修過程において、どのように事業が進められて、現場ではどのような事が起きたのか、地域社会はどのように対応したのかを明らかにする。

以下各章で論じる内容をまとめる。

第1章では、まず研究背景で、本研究に取り組むきっかけとなった疑問から、近世から現代までの韓国の河川治水について理解するためには、近代時期、即ち植民地支配下の河川治水について理解する必要があることを再確認した上、本研究おける大目的を明確にする。研究対象では、洛東江を対象に選んだ理由として、在来水利施設が最も多く残っており、近代的河川改修が近代以前の河川にどのように埋め込まれたのかを見るに、もっとも適した場所であることと、総督府が直轄河川事業を行った主要11河川の内、最も多くの予算を投入したことを挙げた上、洛東江下流域の地理的特徴を説明する。次に、本研究の目的と方法を説明する。方法では、本研究で扱った主要文献を、その目的別に、①近代河川改修以前の洛東江流域における水利事業の把握、②総督府による河川調査と改修事業内容の把握、③改修事業過程における地域社会の対応の把握　に分類し、説明する。なお、論文構成では、近代洛東江における治水・水利の流れの中で各章の位置づけを述べる。論文全体における各章の関係性は、第2章及び第3章が同時代を対象に、2章は水利組合を中心にした現場(地元)の出来事、3章は、総督府(中央・国)による総合的、政策としての河川計画というアプローチをとり、4章は、河川改修と

いう総督府の政策が、実際現場で行われる過程に注目するという構図である。これは最後に、関連する既往研究を整理し、それらの研究と比べて本研究の違いと独自性が何かを明確にし、本研究の位置づけと意義を考察する。特に、韓国における近代河川史及び土木インフラ史の研究は既往研究が殆どなく、近代歴史の研究は植民地時代ということから非常に難しいところがある点を説明する。

第2章では、朝鮮総督府の河川改修が行われる以前の洛東江下流域の状況について記述する。19世紀末多くの日本人農民が朝鮮に移住する時代的背景の中で、1900年初頭日本人移住者が中心になって洛東江沿岸に大規模水利事業を進めたことが、大規模水利事業の始まりであることを指摘する。そして、水利組合の制度的基盤ができた直後の1920年から1925年の間に洛東江沿岸に多数の水利組合が設立され、彼らの主導で活発な水利事業が行われた事を指摘し、各水利組合の水利事業に対して、その経緯と内容を明らかにする。なお、水利事業の技術的特徴として、河川洛東江に対する防水策として、1920年の洪水の経験からその基準にしていると共に、事業目的として個別水利団体の水利区域を守るための灌漑・排水・防水事業であり、河川の総合的コントロールという意味での近代的河川技術には至ってないことを指摘する。

第3章では、1905年の洛東江調査から1927年実際改修に着手するまでの期間、洛東江に対して日本国及び朝鮮総督府が立案した治水の方針がどのようなものかを明らかにする。まず1905年日本内務省技師比田による洛東江調査における治水策について整理する。続いて、朝鮮総督府設置後の1915年から実施した第一期朝鮮河川調査における洛東江河川調査の経緯と内容をまとめて1919年に発表した洛東江治水方針について述べる。そして、第一期河川調査が終了した後，その調査成果を基に樹立した改修計画についてその内容と特徴を整理する。なお、その改修計画が一度挫折した後、1925年の大洪水が発生し、総督府が河川改修を決める中，具体的な水害状況とそれを踏まえて新たに立てられた改修計画について、その内容と特徴を記述する。なお、洛東江治水の方針が、同時期流域で活発に行われた水利事業及び水害によって、より強力でかつ迅速な効果が期待できる計画に移っていったことを明らかにする。

第4章では、実際の河川改修が行われる過程についてまとめる。まず、総督府の直轄河川改修事業における洛東江河川改修の過程を説明し、その中で1934年の大洪水の前後で改修内容と規模で大きな違いがあり、洪水が大きな転換点になった事を指摘する。さらに、洛東江支流の密陽江附近及び本流河口付近を対象に、個々の現場の改修推進過程に着目し、工事をめぐって地域社会ではどのようなことが起きて，どのように対応したのか、その特徴は何なのかについて考察する。密陽江附近については、総督府の河川改修以前の密陽江の治水の歴史から総督府の改修事業までの経緯と変化を、沿岸地域社会の発達との関係で述べる。河口付近については、一川式と呼ばれる改修方式をめぐって、地域社会に活発におきて賛否世論の推移とその特徴を考察する。

第5章では、本研究の成果をまとめて、本研究から今後更に研究が必要とされる課題を整理する。